



# よこと館だより



Est. 1912

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局

## 理事長閑話 埋め草 ⑥⑥

～静かに生涯を終える難しさ 尊厳死・延命治療 その3～

高齢者福祉に関わるものとして生死のテーマは、単純ではありません。自分も長生きをしたいと素直に思い長寿を寿ぎたいと思いますが、長ければ良いとも言えません。無理な延命は自然の定めに従うことだとも思います。苦しく辛い臨終は迎えたくないし周囲に重い負担をかけるのも本意ではありません。自分で判断できる消極的な安楽死があるとすれば、ローマの貴族の尊厳ある人生の終わ方にも惹かれる私です。しかし実際には本人の意志を生かして、静かに、自然に、ロウソクが消えゆくように最後を迎える事は難しい。それは病気との関係もあるし、介護・看護・医療の条件、家族の意向を含めた周囲の環境に依るところが多いからです。

一方高齢者における天寿の迎え方と、人生のまだ中途にいる方が、重篤な病で辛く苦しい絶望的な戦い、生と死の狭間で苦悶する方の場合とは本質的に違います。それは積極的か、消極的かはともかく安楽死をどう考えるかという事でもあります。現在日本においては、緩和ケア・終末期医療について公的なガイドラインで厳密に規定され医療現場で運用されている事は言うまでもありません。

最近強く心を揺すられた事件が発生しました。ALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者、京都の故林優里さん（51）の囑託殺人事件です。軽々しく論ずることは避けるべきと思いますが、今回の林優里さんの囑託殺人事件を理解するときに、私は法的な側面だけではなく、林さんの心を、他者がどのように共感してあげられるのかという点の重要性を思います。

報道によると彼女には主治医を中心とした 30 人の支援チームが彼女の「生」を支えていたという事です。また現在では国会議員として ALS 患者の方が活動されてもいます。当事者も、支える専門職も生をつなぐ懸命な努力をしているのです。でも彼女はお金を払って、自らの命を絶つことを委嘱したのです。思うようにコミュニケーションが取れず、息をすることも儘ならない全身の機能不全、筆舌に尽くしがたい苦しみ、迷いと逡巡、心は荒野をさまよう孤独感に苛まれていたことでしょう。根源的な生の価値と、生きる苦しみの間で。そして深い悲しみの淵で。

さて、64 回で書いた、私の病む友人への返事です。「私は自分の意思で決めることができるうちは、一生懸命生きて、だから必要があれば胃ろうの処置も受けるでしょう。また同時に死に向かう準備も同時にします。ただし他者からの指示で自分の生命を左右されることは望みません」と。支えてくれる人々の心を大切にしたいと思う上での判断です。

日本で自死を選ぶ人は減少しているとはいえ年間 2 万人以上います。(2009 年 32,845 人、2019 年 20,169 人) また孤独死をされる方が 2011 年 26,821 人（ニッセイ基礎研究所等）、23 区内では 2019 年 5,953 人（東京都監察医務院）です。この痛ましい数字も踏まえながら人間の「生の尊厳」を考えなくてはならないとこのテーマの最後に申し上げたいと思います。

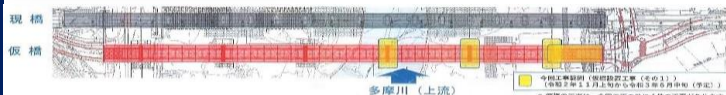
理事長 橋本正明

## 事業本部長メッセージ

富士山を背に多摩川河川敷では再度工事が始まっています。一つは「青柳三丁目堤防、護岸工事」で根川緑道先、多摩川との合流地点の片方が途切れた反対側護岸の整備で、多摩川洪水による浸水被害防止のためです。記憶に新しい昨年台風 19 号で、途切れた堤防部分からの逆流が心配でした。根川流域沿いは特に関心の高い影響のある事です。そしてこの先堤防上の側道、サイクリングロードも延伸される予定で、3 月まで工事は続きます。



もう一つの整備は何と言っても「日野橋架け替えと仮橋設置工事」です。今年から完了まで 12 年、干支の始まりの子年から丁度一回りですが、10 年で新に交通は切り替わります。「都民に親しまれる魅力ある橋梁へ」地域のシンボルとなる美しい斜帳橋、橋脚も 18 から 2 橋脚で歩道も整備され、ほぼ水平だそうです。その間仮橋は立日橋側、川上 30m 上流、トラス形式でかかり長さ 333 m です。幅は 10.2m から 12m と今より少し広い程度ですが、歩道が 2m に広がるようです。日野橋の歴史は古く大正から昭和の時代、そして平成、令和と繋ぎ、2030（令和 12）年に新たな時代の架け橋として今年から工事が始まり生まれ変わります。安全を祈念しつつ進捗を共に感じ見守って行きたいと思います。



保育事業本部長 稲永勝行

## 事業本部情報

### 🌿 児童事業本部 🌿

先日、法人の110年誌発行委員会が開催されました。2022年春発行を目標に、10年間の記録と取り組みの意義を記録することになりました。法人と各事業本部の代表と(株)文化工房の皆さんとの約1年半の作業になります。

児童事業本部のトピックスとしては、現在取り組んでいる至誠障害福祉総合センターの開設、至誠こどもセンターの事業開始、事業本部の組織改革などについて、また今年度の新型コロナウイルス対策会議の取り組みも挙げられます。取り組みの意義として、至誠障害福祉総合センターは、利用者ニーズへ向き合う実践から総合化への展開、至誠こどもセンターは、国からの「児童養護施設は地域ニーズへの支援拠点となるべき」と新しい転換を示されたことへの具現化と重なります。積み重ねられた歴史の上に新たな実践の積み重ねがあったことを、改めて皆で共有していきたいと思います。(児童事業本部事務局長 高橋誠一郎)

### 🏠 保育事業本部 🏠

園舎を改築して3年が過ぎました。待機児解消に少しでもお役に立ちたいと定員増で空間を広げにしましたが、新型コロナウイルス予防で3密を防ぐためにも役立っております。想定外だったのは、会議室として使用していた場所が、職員が園児と食事を別に食べるために活用できた事や保護者のクラス出入りを最小限に抑えるため、3歳～5歳児の衣類等を入れるロッカーを予備のお部屋に移すなど感染症対策に工夫ができた事です。見学対応も室内に入らず、テラス側から室内を見て頂けるようにしました。改築設計の時には想定していないことが多々ありますが、出来るだけ柔軟に建物を活かしたいと思います。これから年度内には、園庭側の隣地を駐車場等に整備して、利便性を図るようにしていきます。今年は行事など予定が立てにくく全てに影響が出ていますが、その折々最善の方法で困難を乗り越えていきたいと思います。

(至誠第二保育園 園長 三浦修子)



### 👤 高齢事業本部至誠ホーム 👤

今年もいつの間にか師走となりました。振り返れば、新型コロナウイルス感染予防に緊張の毎日の一年だったと言っても過言ではないと思います。利用者、家族、地域の皆さんが楽しみにして下さっている行事もすべて中止となりました。そのような中、アウリンコではリモート面会やプチ面会の機会を設けて家族等との交流を継続したほか、毎月、職員さんたちが近況を写真付きでお伝えするメッセージをお送りしています。先日、お母様が入居するご家族より手書きのお手紙をいただきました。「ケアプランを作成していただきありがとうございました。拝見いたし、一言申し上げたく…云々」の文章に『ドキリ』でしたが、文章を追っていくうちにとても温かな気持ちになりました。倒れてから悲観的な発言も多かったお母様が、読書をするまでお元気になり、「ここに来てよかった」「最期もここがいい」と言っているのを知り、心の安定が得られて大変嬉しいとのことでした。また、訪問マッサージを利用されていましたが新型コロナウイルス感染予防の観点からアウリンコではお休みいただいています。そこで、マッサージの先生からお母様に絵手紙を送ってくださり、お母様からはアウリンコの手芸活動で作られた張り絵のはがきをお礼に送られたとのことでした。コロナ禍においても、ご家族や地域の方との心の交流が続いていることに感謝！



(至誠ホームアウリンコ 園長 よしがみ恵子)

## 本部事務局だより

まもなく年末であるが、コロナ禍は第3波のただ中にある。寒くなれば感染が拡大することは科学的に予想されおり、事前の対策を講じることができた問題である。経済を立て直さなければならぬことを考慮しても、GOTOを前倒ししたり拡大したりしてアクセルを全開した政治の責任は重い。また、科学は、現時点での知見に基づく理論を示すものであり、新たな事実が判明すれば理論も変わり得るものである。コロナウィルスのように未だ全貌が明らかになっていない中での対策を論ずる場合には、ある程度幅広く、抑制的に考えざるを得ない。政治は常に限定的な科学的知見の中で日々政策判断しなければならないし、その結果に責任を持たなければならない。「専門家の意見を聞いて…」などと責任を専門家に押し付けたり、逃げを打ってはならないのである。スペイン風邪のパンデミックの時にも第2波より第3波の方が死者数は多かったという事実に基づいた対策が求められる。旧通産省工業技術院の元院長のようにブレーキとアクセルを踏み間違えては大きな事故になりかねない。(法人事務局長 野島 忠幸)

(編集後記)あつという間に年末ですね。毎年1年が過ぎていくのが早い気がします…今年はいつの年にもまして緊張感があり張り詰めた1年だったかと思います。来る年の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。(小)